

ノーモア・ヒバクシャ通信 第33号

発行 2017年2月27日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email hironaga8689@gmail.com
郵便振替口座 00170-5-694752
(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

★もくじ

I. 「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトがスタートしました	P	1
II. 部会、作業グループの取り組みから		
1. 資料庫部会	P	2
2. 継承交流部会		
(1) 被爆者運動から学び合う学習懇談会	P	4
(2) 被爆70年「被爆者として言い残したいこと」	P	4
日本被団協の総会(6月)をめざして報告書発行の予定		
III. 各地の取り組み、関連企画から		
1. 【つなぐPJ】のレポート		
(1) (東京) 12/20(火) 八王子平和・原爆資料館を取材して	P	5
(2) (広島) 2/8(日) 祖母、篠田恵を取材して～「私の原爆体験記」	P	9
(3) (広島) 1/1(日) 祖母、篠田恵を取材して～「あなた、骨の上を歩いとる	P	18
(4) (長崎) 1/14(土) 長崎市 平和への取り組み	P	22

I. 「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトがスタートしました

2月17日(金) 首都大学東京、渡邊英徳研究室(システムデザイン学部)で第1回会合を開き、「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトが正式にスタートしました。

次の2つのことをめざします。

- ①「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」が収集している被爆者の体験資料をデジタルアーカイブに収納し、活用・普及できる状態にすること。
- ②デジタルアーカイブの制作に関わることを通して、被爆者の体験を学び後世に伝えていく人を広げ、増やしていくこと。

このプロジェクトは、三つの活動を進めます。

①データ化プロジェクト

被爆体験の手記・証言集などをスキャンしてデータにしていく作業を行います。スキャンの器材と技術は、富士ゼロックスにご提供いただきます。資料を保存しているコープみらいプラザ浦和を拠点に活動します。

②アーカイブ化プロジェクト

データ化された情報(被爆体験の手記・証言集など)を読み込み、データベースに登録していく作業です。全国どこからでも活動に参加できます。この活動に係わるデータベ

ースは、首都大学東京渡邊研究室のサーバをお借りします。継続して活動するグループの結成とネットワーク化を想定します。

③活用プロジェクト

登録された情報（アーカイブ）を使って、学習や継承活動のプログラムを検討します。全国の生協などにアーカイブを使った学習を呼びかけます。

このプロジェクトは、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会のもとに首都大学東京渡邊研究室、日本生協連、富士ゼロックスなどで構成し、事務局を日本生協連に担っていただきます。当面、1期2年の想定で取り組み、必要に応じ継続を判断します。プロジェクトの進展や活動内容について、今後、活動情報を発信していきます。

II. 部会、作業グループの取り組みから

1. 資料庫部会

■ 収集資料のアーカイブ構築に向けて

資料庫部会では、日本被団協が所蔵する資料と会が収集してきた資料のうち、書籍・冊子類（0：総合（目録・戦災誌、年史）、1：手記・体験記、2：原爆文学・芸術、3被爆者調査・研究、4．被爆者運動史、5：核兵器・原水禁運動、6：継承（平和教育ほか）、9：空襲・沖縄・アウシュビッツ等 の8ジャンル）については、目録整理がほぼ終わりました。

さらに収集を継続する一方で、これらをもとに継承する会としてのアーカイブ（電子化して広く利用することが可能な資料のデジタル・アーカイブを含む）をつくり上げていく予定です。

その構築のためには、専門家の助言、協力が不可欠です。1月31日（火）に資料庫部会の濱谷、栗原がアーカイブ学の専門家・加藤聖文先生（国文学研究資料館研究部准教授）を訪問、継承する会の概要を紹介し、歴史資料の現状やデジタル化に伴う問題点、歴史資料における文脈（誰が何のためにつくったかが分かるようにしておくこと）の重要性、資料整理のすすめ方、個人情報や著作権についての考え方など、懇切丁寧なお話をうかがうことができました。4月には、南浦和の資料室で実際の資料をご覧いただきながら、ご相談ができる予定です。

また、各都道府県の発行した手記・体験記、運動資料については、昨秋開かれた日本被団協全国都道府県代表者会議で、各県代表の方々に各会で発行された資料の収集状況一覧をお渡しして、発行資料の確認と未収集資料のご寄贈をお願いしました。これをさらに徹底し、資料の保存とWeb公開へのご協力をいただくため、2月21日（火）、日本被団協の田中事務局長、木戸事務局次長、和田事務局次長・工藤事務局員（資料庫担当）と濱谷、栗原が打ち合わせをしました。

すでに会が解散した県も含め、各県ごとの状況をおさえて対応策をとるために、日本被団協として各地の会とつなぐ担当者を置いていただき、また、アーカイブ構築のための推

進体制に被爆者委員として加わっていただくことなどを確認しました。

■ 相次ぐ図書類の寄贈

継承する会設立から5年、会の柱の一つである資料収集・整理を担う資料庫部会では、被爆者運動が残した資料を散逸しないうちに収集するため、関係者に資料の寄贈を呼びかけてきました。

亡くなられた役員のご遺族はもとより、できればご本人が元気でおられるうちのご寄贈（生前贈与）を、の呼びかけに、三宅信雄さん（埼玉）が応えてくださいました。昨年8月に志木市のお宅を訪問し、資料の現状を見せていただきました。東京・世田谷区に在住時、東友会がとりくんだ被爆50年「未来への伝言」の区内被爆者分の証言、会報のバックナンバー、各所で証言したときの原稿・レジュメや報道記事、ピースボート乗船時のアルバム・動画など、資料はファイルに綴じて書架やキャビネットにぎっしり収められてい



ます。そのなかから、『今を生きぬいて 2006 実態調査報告書』（世田谷同友会）、『生死の火—広島大学原爆戦災誌』（1975、広島大学原爆死没者慰霊行事委員会）をはじめとする段ボールいっぱい書籍や資料を12月20日、三宅さん自身が南浦和の資料室に持参し寄贈してくださいました〔写真〕。まだ、使用中の資料についてもリストを

つくり、息子さんに申し送ってくださるということです。

また、賛助会員の石田俊明さん（千葉、元教員）からは、個人研究のために収集された原爆関連図書をご寄贈いただきました。大田洋子『屍の街』（1972、潮文庫）、原民喜『夏の花』（1973、晶文社）、『永井隆全集 全1巻』（1971、講談社）などの文学書や、金井利博『核権力 広島の告発』（1970）、中国新聞社の『ヒロシマの記録』（1975～）など100冊余り。会として未入手の文献はもとより、原爆関連の基本的文献を複数冊所蔵できるのはありがたいことです。

お2人のご協力に深く感謝申し上げます。

■ 被爆者運動資料の整理作業へ事前学習会も

今年も2月23日（木）から、昭和女子大の歴史文化学科の松田忍先生と学生さんらによる春休みを利用した被爆者運動資料の整理作業が始まります。今回は、3月11日（土）までの6回にわたり延べ約30人が参加。日本被団協の資料はほぼ終わったので、被爆者

の自分史関連の資料（静岡から九州分）に加え、愛知から送られてきた 1977NGO 国際シンポジウムの調査票など各県被爆者運動関連資料の整理にとりかかる予定です。

これに先立つ 2 月 18 日（土）の午後、昭和女子大の歴史研究室で、松田先生のご指導により事前学習会が開かれました。あらかじめ『被爆者たちの戦後 50 年』（栗原著、1995、岩波ブックレット）を読んでこられた学生さんの中には、高校時代の修学旅行で被爆者の話を聞いたことがある人や、広島に住んで平和教育を受けたことのある人もいて、戦争や原爆についての関心も深く、テレビの報道や教科書で知ったつもりでいたが、資料整理をつうじて被爆者の思いを感じとりたい、被爆者の要求や歴史の一部を抹消してはいけない、など意欲的な発言が相次ぎました。

2. 継承交流部会

(1) 被爆者運動から学び合う学習懇談会

■ シリーズ 7 「原爆で終戦」のウソと役割

2 月 25 日（土）午後、プラザエフ 5 階の会議室で、シリーズ 7 回目の学習懇談会を開きました。問題提起は吉田一人さん（長崎被爆、継承する会理事）。30 人を超える参加者で盛り上がった学習会の詳細は、次号にて報告します。

継承交流部会では、この被爆者運動に学び合う学習懇談会を新年度も継続して開催することとしています。

次回（シリーズ 8）は 4 月 8 日（土）13:30～、プラザエフの 5 階会議室で。

日本被団協事務局次長の木戸季市さん（当会事務局）が「沖縄戦と被爆者運動—9.9 学習会と沖縄ツアーをふまえて」（仮題）をテーマに問題提起。昨年 12 月に被団協が行った沖縄ツアーの成果もふまえ、原爆被害への国家補償制度を求めつづけてきた被爆者運動が、国の「受忍」政策をのりこえるため沖縄戦や空襲の被害者と連帯し、民間人の戦争被害に対する国家補償をどのように実現していくか、その方向性をさぐってみたいと考えています。

(2) 被爆 70 年「被爆者として言い残したいこと」

日本被団協の総会（6 月）をめざして報告書発行の予定

被爆 70 年に日本被団協と継承する会が協力して行った「被爆者として言い残したいこと」調査について、調査の集計・まとめにあたっている専門家グループでは、いま、報告書作成に向けて一枚一枚の調査票の自由記述を手分けして読み込む作業をつづけています。

調査を実施したのは、安倍政権が多くの国民の反対にもかかわらず安保関連法（戦争法）を国会で強行しようとしていた 2015 年の夏。それだけに、選択肢の集計結果は、設問

の「被爆者として今とくに心にかかっていること」に、「日本がまた戦争する国になるのではないか」(64.6%)が「自分の健康」(63.7%)とほぼ並んで「核兵器がまた使われるのではないか」(53.8%)を上回り、また、「被爆者として日本政府に求めたいこと」では、「被爆国として核保有国に核兵器廃絶をせまる」(72.2%)や「被爆の実相をしっかりと調査し、世界に広める」(67.55)を抜き去り、「憲法9条を厳守し、戦争によらない国づくりをすすめる」(77.3%)が最も多いというように、被爆者のみなさんの戦争へのおそれ
が顕著にあらわれていたのが特徴的でした。

自由記述欄に書き込まれたことばの一つ一つにも、「戦争だけは絶対ダメ」「憲法9条は変えてはならない」「戦争のない平和な国にしてもらいたい」「原爆はどんな理由があろうとも、絶対に使ってはならない」…など、原爆体験をもとにした核兵器と戦争否定の切実な思いが刻まれています。

報告書は、今年6月の日本被団協定期総会までにまとめる予定です。

Ⅲ. 各地の取り組み、関連企画から

1. 【つなぐPJ】のレポート

(1) (東京) 12/20(火) 八王子平和・原爆資料館を取材して

みなさんこんにちは、つなぐPJのしのです！

今回は東京都八王子市にある「八王子平和・原爆資料館」を訪ねました。

八王子平和・原爆資料館

住所：東京都八王子市元本郷町3-17-5

時間：10時～16時 開館日：水曜、金曜

HP：<http://hachioujiheiwagennbaku.web.fc2.com/>

お話を聞かせていただいたのは資料館の運営委員、竹内良男さんです。



左：竹内さん 右：しの

■八王子駅から

当時の待ち合わせは八王子駅。大きな平たい荷物を小脇に抱えた竹内さんと合流して目的地に向かって歩き始めました。

竹内さんは元々高校の教員をされていました。数年前に定年し、今は戦争体験を語り継ぐ活動に注力し、イベントなどを定期的開催されています。そんな中、10月1日に竹内さんの主催した被爆者とのトークセッションイベント（取材記事：

<http://keishoblog.com/?p=1377>) が私が彼とお話をするきっかけになりました。

「八王子は元々城下町で、これから通るところは千人町で千人同心と言われる武家の集団が住んでいた場所なの。そしてこちらが馬場横丁…」

と歩きなら流れるように指をさす竹内さんは八王子の歴史にとっても詳しく、江戸時代の街の様子から現在に至るまでの歴史を教えてくださいました。江戸時代から武家の街として栄えた八王子は城下町として多くの人で賑わい、戦時中には市街地の80%を消失する大空襲に晒されました。死者445人、負傷者2,000人にも上る大被害を受けた街には今も空襲の爪痕を垣間見ることができます。大通りに並ぶ銀杏並木のある一帯ほどの木も北側に黒い跡が線状の跡があり、それを左右から新皮が巻き込むように木が育っています。これは空襲のために起こった大火災が南から吹く風に押されて木が焼け焦がされた跡なのだと思います。



銀杏並木の焼け跡

■竹内さんが原爆に興味を持ったきっかけとは

—僕は大学生の時に広島に旅行に行ったことがあるんだけど、その時はただ旅行しただけだった。30年くらい前に高校教員になって生徒を連れて修学旅行に行った時に被爆者の人に会ってショックを受けてしまって。それからもう100回以上は広島に行ってるしここ30年、8月6日は広島にいるよ。

竹内さんは道すがらにそんなお話をしてくださいました。



外から見た八王子平和・原爆資料館

■八王子平和・原爆資料館

八王子平和・原爆資料館は八王子市役所のすぐ右隣のビルの二階にあります。

青と赤の文字で窓に資料館の名前。入り口の看板に研究センターなんて少し厳つい看板があって一人で訪れると少し入るのをためらってしまうかもしれませんが、安心してください資料館はみなさんに開かれています。

資料室内は原爆に関係した書物や写真、当時の焼け跡から採取してきた資料、芸術作品などが並べられていました。



資料館と竹内さん



原爆に関連する写真



焼け跡から採取した焼けた瓦や溶けた陶器など



原爆で亡くなった少年の身につけていた服

はご連絡ください。

「これが広島ではなく、東京にあることに意味がある。」

竹内さんが小脇に抱えていた荷物は、この被爆した少年が身につけていた焼けて血の染みた服だったのです。原爆は広島と長崎に落とされましたが、未だ核兵器は全世界に15,000発以上あると言われていています。他人事、過去のことではなく、これから起こりうる脅威として、自分ごととして考えて欲しいと思います。

八王子 平和・戦争資料館ではこれらの資料の貸し出しもしていますので、必要な場合

■資料館からの募集

現在運営員はパソコンや IT を使える人がほとんどいない状態ですので、HP の作成や資料整理のボランティアを募集しています。

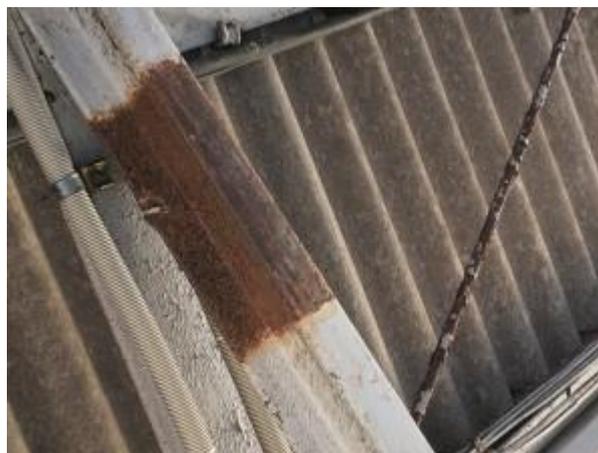
■高尾駅ホームの弾丸跡

最後に見せたいものがある。と竹内さんは一駅先の高尾駅へ連れて行ってくださいました。

なんと駅のホームの鉄柱には 71 年前の弾丸の跡。上から斜め下に鉄が捻られ穴が開いているのを目の当たりにすると当時の掃射の勢いを生々しく感じました。



竹内さんの頭上に弾丸跡のある鉄柱



弾丸跡

近々この鉄柱も撤去されるとのことなので、興味のある方はお急ぎください。

以上、八王子平和・原爆資料館、いかがだったでしょうか。東京都心からこんなに近いところに原爆の実態を知ることのできる資料館がありますので是非お立ち寄りください。みなさんのご意見やご感想も楽しみにお待ちしております。

しの（継承活動に取り組む人々をつなぐ P J）

(2) (広島) 2/8(日) 祖母、篠田恵を取材して～「私の原爆体験記」

みなさんこんにちは、つなぐPJのしのです！

私の祖母である篠田恵は広島原爆の被爆者でもあります。

2010年、私の頼みを聞き届け祖母は語り部として自身の体験を語る活動を始めました。最初は涙を流しながら言葉が出てこない場面もあった祖母の語り部。しかし最近では国内外から訪れる小・中学生、高校生、留学生、社会人、色んな方の感想に勇気づけられ「生きているうちは語らなければ」と定期的に通っている病院や用事の合間を縫っては語り部活動をしています。

少しずつ活動を続けながら今年で7年目、この度彼女の体験を見える形でまとめる作業をしようということになり彼女の体験をまとめました。

それではみなさん、読んでください。

原爆体験記

篠田恵 (旧姓 世羅恵)

こんにちは、篠田恵です。

1945年(昭和20年8月6日午前8時15分)私は爆心地より、2.8kmにあった我が家で世界で初めて落とされた原子爆弾により被爆しました。女学校2年生(13歳)の時でした。



図1：被爆したときの家族の場所

当日広島市内にいて被爆した家族は、両親と姉3人、弟1人。父は兵隊さんの服を作る所である被服廠に勤め、家には母と2才半になる弟、社会人だった姉2人のうち長姉は爆心地から8キロ位離れた所の三菱工場へ、次姉は爆心地から500メートルの所の銀行へ出勤しており、三姉は女学校4年生で学校から作業場に向かっていました。

当時の広島は人口30万人に近い大きな都市でした。原爆が投下された日は住民、兵隊、様々な作業に集まった人々、学生たちでさらに人口は35万位に膨れ上がっていたと言われていいます。特に街には多くの兵隊さんがいました。従って兵隊に関連した会社や工場が多くありましたが若者は召集令状、いわゆる”赤紙”が来ると兵隊さんになっていかれ、どの会社も工場も農家も手薄になりました。

私たち女学生や中学校の男子学生も3年生以上は学校へは行かず、それぞれ決められた会社や工場で働いていました。これを学徒動員と呼びます。私たちのような1、2年も学徒動員です。戦争をするために大人ほどは役に立たないので短期で戦争で使う道具を作る所である兵器廠、兵隊さんのための食料を取り扱う糧秣（りょうまつ）廠、被服廠、煙草を作る専売局などに派遣されて仕事をしていましたが、中でも一番多かったのが建物疎開だったように思います。建物疎開とは当時木造家屋ばかりだった住宅地に火で焼き払うための爆弾である焼夷弾が落ちたとき、火災の被害がある程度の範囲で収まるよう、また道幅を広げて自動車が通れるようにするために家を間引く作業です。柱の下の方を兵隊さんたちが切り、家の柱の上の方にくくった縄を生徒みんなが綱引きのように「ヨイショ、ヨイショ」と引いて家を倒します。それを私たちが片付けるのです。

当時は食糧難で毎日のように大根を細切れにしたものを少量のお米と一緒に炊いた大根めしを食べていました。日用品や食べ物など、生活の中で消耗するものは1人あたり使ったり食べたりできる量が決められていて、その割り当てられた量を国が作った切符と交換する配給制という制度があった関係で魚や肉も1ヵ月に1度食べれば良い位でした。

原爆が投下された8月6日当日も建物疎開に行く予定でしたが連日の真夏の炎天下の建物疎開で私はとうとう体調を崩し朝起きることができませんでした。母も起こしてくれませんでした。私がいまにも疲れていたこと、そして父の云った言葉があったからだったのでしょうか。昭和16年12月8日、ハワイ・レイテ島を騙し討ちして戦争が始まりました。父は、「この戦争は絶対に負ける。あの大きなアメリカを相手に資源のない日本がなんで勝てるか。学校や作業には無理矢理行かせるなよ、もしものことがあったら後悔するぞ。」と云っていました。

私の父は大正の始めから昭和の初まで14年間出稼ぎのためアメリカにいました。母も5年おり、そのときは4人の子供をつれて一時帰国していました。ですからアメリカのことをよく知っていました。



図2:原爆当日の自宅の様子

目が覚めたときは、集合の時間で現地まで行くには1時間余りかかるので、寝ぼけ顔して柱によりかかり弟に折り紙を折っていました。弟はお碗の豆を一粒つづ食べながら私の指先を見ていました。

そこに隣のおばさんが「石臼を貸してもらえんかねえ」と云って来られました。



図 3: 石臼

石臼とは大きな石を2つ上下に重ね、その間で麦や米を粉にするための道具です。母は上石を抱えて来て、縁側で何か立ち話をしていました。弟はそれを見て立ち上がり「おばちゃんも食べんちゃい」と持っていたお椀を差し出しました。

その瞬間、私の横をポウーという音と共に大きなオレンジ色の焰が家の中にまで入って来ました。後ろ側の障子がメラメラと燃え上がり、私は本能的に「水」と思って炊事場に行こうと立ち上がりました。

<http://azuref.blog130.fc2.com/blog-entry-900.html>



図 4: 光と炎が家に入ってきた

刹那、炊事場に行くために通る4畳の和室の畳がすり鉢状に下に落ち込み、私はその中心にずり落ちました。私はその中でおそらく頭をおさえていたでしょう。後から来た爆風のためか、瓦や額縁、障子、雨戸、天井などあらゆる物がガラガラ降ってきました。

何分位たったでしょうか。気味悪いほどの静けさになりました。

「恵ちゃん、恵ちゃん」

という母の呼ぶ声に私は我に返り、ずり落ちていた所から一生懸命に這い上がり母のところに行き



図 5: 熱線と爆風に襲われる

ました。母と弟は右半身、おばさんは左半身、3人とも特に素肌が出ていた顔から足まで大火傷負っています。私は何で切ったか頭から血がべっとりと生温かく流れています。足にも何が落ちたのか、痛みを感じていました。弟は怖さのためか声も出ずただブルブル震えていました。私は飛行機の音も聞いていないし何が何だかわかりませんでした。

母は私のことを心配をしてくれましたが、私は一刻も早く弟と母の手当をしてやりたくて、薬箱を探しに家に入りました。母は投下されて爆発しなかった不発弾が落ちているかも知れないからと云って止めましたが、爆弾が落ちた様子もなく幸

いに薬箱も火傷の薬も有り、手当をしてやりましたがどこも赤く腫れあがり皮のめくれている所も痛々しくガーゼに薬を塗って当ててやることしかできませんでした。



図 6: 縁側

http://tecy.net/03/minnkaf04_b.jpg

がいた部屋の天井は上に押し上げられていました。そして家中の障子や雨戸も吹っ飛び柱だけが残っているだけでした。縁側に置いていた重たいミシンは、隣の部屋の真ん中に横倒しになり、また外に干していた布団は竿ごと折れて炊事場まで3部屋も吹き飛ばされ、畳の上は2、30cmの瓦礫の山となっています。物干し竿のついたままの布団は畳の下に落ちた私の上をものすごい速さで通り過ぎて行ったのでしょうか。私は畳がずり落ちなかったら布団と一緒に飛ばされ生きてはいなかったろうと思わずとしました。



図 7: 大八車

<http://tecy.net/03/minnkai.html>

家の表の方でわいわい人声がするので行ってみると、近所で1軒だけあった屋根が藁でできている家が焼け落ちていました。その家のお婆さんは

「中にお婆あさんがおられたはずだ」

と狂ったように家の周りをまわっていらっしやいました。

私の家の方へと見るとメラメラと燃え上がった障子は後から来た爆風に吹き消されたようでしたが、屋根には大きな穴が開いています。下から見ると空と目が合いました。私

がいた部屋の天井は上に押し上げられていました。そして家中の障子や雨戸も吹っ飛び柱だけが残っているだけでした。縁側に置いていた重たいミシンは、隣の部屋の真ん中に横倒しになり、また外に干していた布団は竿ごと折れて炊事場まで3部屋も吹き飛ばされ、畳の上は2、30cmの瓦礫の山となっています。物干し竿のついたままの布団は畳の下に落ちた私の上をものすごい速さで通り過ぎて行ったのでしょうか。私は畳がずり落ちなかったら布団と一緒に飛ばされ生きてはいなかったろうと思わずとしました。

私たちはこの家にはとても住めないし4、5km離れた母の伯母の家に避難することにしましたが、母も弟も大火傷をしていておんぶすることも抱っこすることもできません。それで私が大きな荷物を載せて運ぶための大八車を借りに行くことにしました。

1人で歩いていくと、どの家も瓦が壊れたり窓ガラスが割れたり、田畑に点在する家々もかなり被害にあったようです。中には焼け落ちた家もあり、ここも藁の屋根のある藁屋だったんだなと1人思い思い伯母の家に着きました。

伯母は、「広島は何があったん、ここらも家がゆらいでゴミが落ちて掃除をしとるとこよ」



自宅から伯母宅へ

と云われました。私が母と弟が大火傷をしていること、家が柱だけ残っている状態で雨戸も障子も飛ばされたことを告げると、伯母は「それは大変じゃ、早う帰って連れてきんさい。」と快く大八車を出し、土手まで押し上げて貸してくださいました。

1kmくらい帰ったところで親せきの人と会いました。おばさんは「うちは焼夷弾が落ちて丸焼けになったんよ」と云われました。

私は家に爆弾が落ちたこと、先ほど大八車を借りた伯母に話したことを伝えました。おばさんは「気を付けて、早う連れて来んさいよ。」と云われて別れ、早く帰らねばと母と弟のことを考えながら足を早めました。

また1kmくらい帰ったところで竹藪の中が何かざわめいています。よく見るとそれは兵隊さんでした。すでに息絶えた人、服はボロボロで膝を抱えている人、痛い痛いとうめいている人たちがいます。後からトラックが来て、止まったと思うと兵隊さんが大怪我や大火傷をした兵隊さんを降ろして竹藪の中へ運んで行きます。

市内で何があったかまったく知らない私は、どうして兵隊さんがと不審に思いながら、また歩き出しました。

しばらく歩くと前方から何かやってきます。黒っぽい集団のようです。田んぼの中の一本道を私の方へ向かって来ているのです。何だろう、何だろうと思いながら近づいて目に飛び込んできたもの、それは今まで見たこともない人たちの姿でした。髪の毛は焼け縮れ、顔は薄黒く、ボロボロの服を着て指先から何かぶら下げている人、血を流している人もいます。子供をおんぶしている人、子供の手を引いて半身にボロがまとわりついている人もいます。中には放心状態でぶつかって来る人もいて大勢の人が私に向かって来るは来るは…！

私は一瞬この人たちはどこから来たのか、私が地獄に迷い込んだのかと怖くなり出来るだけ見ないように見ないように下を向いて一歩ずつ歩きました。

市内方面に向かっているのは私一人です。しかも大八車を引いて一歩一歩しか動くことができません。少し行くと農家の庭先に人が集まっています。何をしているのかな、と思って見るとキュウリを摺って火傷したところにべちゃべちゃと塗ってあげておられました。「は一、キュウリが火傷にいいのか。」と思いながら帰っていると、次に通りがかった家ではジャガイモを摺って塗ってあげておられました。

我が家の近くの土手まで帰ると人の流れも多少減りました。でも近くの竹藪の中は先ほどうすれ違ったような人でいっぱいです。家に着いたのはもう日も沈み薄暗かったように思います。

その頃すぐ上姉が動員先から帰宅しました。山裾を通過して帰ったようで無事でした。上姉は家から5kmくらいのところにある三菱に勤務していて姉からは「無事であるがけが人の看護のため今日は帰れない」と人づてに連絡がありほっとしました。しかし私たちの中では爆心地から一番近くの銀行に勤務していた中の姉が帰って来ません。姉は月曜日で「今日から掃除当番だ。」と云っていつもより早いバスで出かけたそうです。

父は夜遅くに帰ってきました。私の姿をみてほっとした様子でしたが、私は「幸代姉さんがまだ…」というのが精一杯でした。父はもう察していたのか目に涙が光っていました。

父は被服廠に勤務していて、私を探しに建物疎開場所に行ったがどうしてもわからないので海の方から焼け残った山裾の方を回って帰宅したそうです。

その夜は敵の飛行機から落とされる爆弾から避難するために掘ったトンネルである防空壕で寝ようと思いましたが、中はけが人や火傷の人でいっぱいな上に藁のにおいと人いきれで臭くて臭くて中にはおれず、友達4、5人で防空壕のそばの道端で寝ることにしました。箆をしいて横になりました。夜空は何事もなかったかのようにきれいな星がまたいでいました。流れ星もいくつか見ましたが市内の方は明るくまだ何か燃えているようでした。空襲警報が鳴ると防空頭巾をかぶり防空壕へ入ったり出たりでその夜はどうとう一睡もできませんでした。

明けて7日、父と2人で帰らぬ姉を探しに銀行へ向けて出かけました。崩れかけた家々を抜けると、そこは見渡す限りの焼野原です。市内を囲む山々が近くに見え市内の鉄筋の建物や金庫などが焼け残ってまだあちこちがくすぶっていました。街中が瓦礫の山です。焼けて横たわる電柱をまだぎ電線に足を取られ、焼け瓦の上を歩き、ゆっくりゆっくり足場をさがしながら姉が勤務していた銀行の本店へ向かいました。

わいわいと人だかりがしているので行ってみると昨日であったような人たちが沢山集まっていました。トラックの運転手らしき人が

「北の方へ行くが乗っていく人はいないかー 帰る人はいないかー」

大きな声で何度も何度も叫ばれていました。

私たちは姉の勤めていた銀行の本店の前に足を止めました。戸を開いたとたん私はびっくりしました。カウンターの上から土間にぎっしりと、昨日見たおぼけのような人たちが「水を」「お母さん」と云いながら足の踏み場もないほどにころがっているのです。全くこの世の地獄です。私はその場に立ちすくんでいました。父は1人1人「幸代はおらんか、世羅幸代はおらんかー」と探して回りましたが、そこにはいませんでした。

本店から広い電車を歩いて行くと、電車が丸焼けになり中では座ったままで死んでいるような人もいました。また、電車の陰では力尽きたのか座り込んでいる人、私たちのように家族を探しに来たと思われる方々がぼつぼつ歩いておられました。

原爆投下の目標地点になった相生橋の方へ目をやると、昨日出会った火傷や怪我人とはまるで違い真黒焦げの死体のごろごろ、性別も分からず、股間で何とか判断するほどです。また、お母さんに手を引かれた子ども、子どもをおんぶされたまま一緒に亡くなっている母子、防火用水には水を求めてか、熱さから逃れるためか頭から突っ込んだ人で満杯です。

馬も2、3頭死んでいました。馬のおなかが割れて黄色い臓器が出ているのが印象に残っています。その当時はなぜそのような状態になったのが疑問でしたが、当時爆風の秒速440メートルの風圧を受けて腹が破裂したのだということを後に知りました。近くには乗馬靴を履いた兵隊さんらしき人も亡くなっていました。

私たちの姉が勤務していた銀行も跡形もなく焼き尽くされ、金庫だけが焼け残っていました。どこかで生きていてほしいと神仏に祈りながら手を合わせました。

「私はもうあのむごい有様は見たくない。」と相生橋の方へ行きました。相生橋は車道と歩道が両側にめくれ上がり、間から水の流れが見え死体も沢山浮かんでいました。橋のもとには兵隊さんたちが引き上げた死体が20体くらい並んでいます。私は1人1人見ましたが、姉の姿はありませんでした。

帰りは川土手を歩くことにしました。こちらの遺体の損傷もひどく肋骨まで焼けている人もいました。また、誰が敷いたのかわかりませんが、むしろの上にもう亡くなっていると思われるお母さんのそばに弟と同じ2才くらいの無傷の子どもがぼつんと座っていました。子どもの前にはカンパンが5、6個置いてありました。あの子はその後どうなったのでしょうか。結局その日、姉を見つけることはできませんでした。

また、近所の人たちが「幸ちゃんによく似た人がいるよ。」と知らせてくれる人がいれば何はさて置き竹藪の中や橋の下にも飛んで行きました、それは姉ではありませんでした。

外を歩いているとき、大八車に横たわって運ばれている人から「世羅さんでしょう、世羅さんでしょう。」と声をかけられました。余りにも変わり果てた姿に私は一瞬それが誰だかわかりませんでした。その人は一緒に女学校へ通ったクラスメートで、彼女は大火傷をして親戚の家に連れて行ってもらう途中でした。

2日経った頃だったのでしょうか。兵隊さんが油缶を2人でかつぎ火傷した人に塗ってくださり、また大きなおむすびを「1人1個ずつよ。」と言って持って来てくださいました。ギンギラギンギラ光るお米だけのご飯を久しく見たこともなく、食事のことすら忘れていた私たちは大喜びしていただきました。それはととても美味しく、今でもその味を忘れることはできません。

父はいつまでも外で寝ることはできないと家を片付けて仮修繕し、やっと畳の上で寝ることができるようになりました。とはいっても家の内外を遮るものがないので家の中で寝ても道を歩く人が見えますし、道を行く人も家の中が丸見えでした。それでも屋根の下で寝れるのはとてもとても嬉しかったです。夜トイレに起きると、母は柱によりかかり道の方を見えています。「何しとるん？」と聞くと「幸ちゃんが帰って来んかと思ってねー」と姉の帰りを待ち続ける母の姿を幾夜も見ました。私も子の親となり、母の気持ちがわかるようになりました。

8月15日、天皇陛下の玉音放送を聴きました。雑音もひどく私にはよく分かりませんが、皆の様子で日本が戦争に負けたことだけは理解できました。父の云ったことは本当だったなあと思いました。この先どうなるかはわからないながら、明かりが外に漏れないように黒い布で電気を覆う必要もなくなったため家の中が明るくなりとても嬉しかったです。

終戦後いち早く従兄が兵隊から帰ってきました。20日ごろに兄も続きます。8月の末ごろ2人は爆心地から1.5km位のところにあった従兄の家の焼け跡を掘り起こし、2人とも白血病で亡くなりました。従兄弟は30代半ば、兄は56歳でした。元気で帰ってきた2人が直接被曝も受けてないのに原爆症と言われる病気で亡くなったのは残留放射線のせいだと思います。

弟の火傷も9月ごろにはほとんどよくなり、飛行機の音がすると表に出て「姉ちゃんを返せ！姉ちゃんを返せ！」と言っていました。9月17日の大型台風にすっかりおびえ、空を見るのも怖がるようになり10月初め頃から原爆症のひとつである下痢が始まりました。戦後の食糧難の時分に食べさせてやる物もなく「母ちゃん、もうカボチャはいや…」と言う言葉に母もそっと涙を拭いている姿を見ました。2才半の一番かわいい盛りの弟は楽しいことは一度もなく骸骨のようになって、母の胸にしっかり抱かれて10月22日、天国の姉の下に行きました。

食糧難はますますひどくなり、私は姉と2人でお芋の買い出しに3~4kmの道のりを歩いて田舎の方へ行きました。でも私たちは7人の大家族で買って来てもすぐなくなってしまいます。主な食事は大根を細かく刻んで米を嵩増しした大根飯とカボチャだったように思います。当時は今のカボチャと違いで大きく大きく作ります。その昔は牛の餌にしていたようなものだったとか。父は味のないカボチャは食べられないと云って一升瓶を並べたりりんご箱を大八車に乗せて綺麗な海水の汲める海までの約10kmの道を塩を求め行ったことも2度ありました。

今、日本は私たちには想像もできなかつたくらい食料が十分あります。いつでも、どこでもおなか一杯食べることができます。スーパーの食品の残りが沢山処分されていると聞きます。この戦争でも約310万の兵隊さんが亡くなったと言われていています。その兵隊さんの多くは食べるものがなかったり、病気で亡くなったと言われていています。また、人間だけでなく、牛は食料に馬は荷物運びをするために戦場に駆り出され、犬は毛皮を取られたと聞きました。この兵士たちの親、妻、子供、兄弟姉妹、どれだけの人が苦勞し、涙を流したことでしょう。

広島に投下された一発の原子爆弾（リトルボーイ）は長さ3メートル、直径70cm、重さ4tと小さいものですが、爆発すると上空600メートルで、中心温度は数百万度、表面温度が7,000度の火の球となり、地上の温度は3,000～4,000度にもなります。爆風は秒速440メートルで爆心地にあった建物の90%以上が壊され、焼かれました。その年（昭和20年）の年末までに、およそ14万人が死亡したと言われています。

今ある平和公園は、被爆前は広島で一番賑やかな街で、映画館や劇場、商店が立ち並んでいましたが、一発の原爆で見るも無残な姿になりました。中心部にあった病院では医者90%、看護師93%がなくなっています。それほどの被害がその一帯に起こっているのです。多くの人を失ったこの場所を慰霊の地にしたいと土を盛り、平和記念公園にしました。ここに来られた時は、そのことを頭の片隅に置いて歩いていただければと思います。

原爆投下から数十年、私は原爆に関する書物を読み事実を確かめることにしました。スイスの医師、ジュノー博士が15tもの医療品を広島に送ってくださっていたとは深い感動を覚えました。一方、この原爆で親や住む家も一度に無くした被爆孤児が2,000～6,000人いたことも知りました。このお子達の生活を垣間見た時、あまりにかわいそうで私は胸が締め付けられ、涙が止まりませんでした。

戦争ってなんですか。

人と人の殺し合い。

誰のためにするんですか。

一発の原子爆弾でその年12月末までおおよそ14万人が亡くなったと云われています。

そして放射線は様々な病気を発症させていつまでも人々を苦しめるのです。私たちの家族も父は肝臓がん、母は胃がん、姉は肺がん、兄と従兄は入市被曝なのに白血病で亡くなりました。私は78歳で膵臓がんと診断され大手術をしました。70年経った今も被曝者は色々な病気と戦い、そして不安な日々を送っています。

「戦争は人間のしわざです」とローマ法王が云われました。今度は人間の英知で2度と戦争のない世界にしたいものです。核兵器などもってのほかです。核の恐ろしさは広島・長崎で十分わかったはずです。

今、地球上に約1万5000発もの核兵器があり、その威力は広島に投下された原爆の数百倍、数千倍と言われています。再び戦争で核兵器が使われれば地球は壊滅するでしょう。21世紀こそ戦争のない核兵器のない平和な世界になりますよう、今を生きる人間こそ、自分に与えられた使命をしっかりと果たして生きましょ。私の話が平和の一粒の種にでもなれば、本当に嬉しいです。

広島の心（平和宣言より）

「平和、それはヒロシマの心である。」（昭和 52 年）

「この世の中で平和ほど尊いものはない。」（昭和 53 年）

「平和を求め、ヒロシマは語り、ヒロシマは訴え続けなければならない。」（昭和 54 年）

「平和とは、単に戦争の防止のみにとどまらず、憎しみを超えた愛と理性に基づき、人類の全てが共存共栄することである。」（昭和 54 年）

終

いかがでしたでしょうか？

一言でもご意見、ご感想をいただけると祖母も私も嬉しいです。県外の方はぜひこの思い出も一緒に広島を訪れてみてください。

しの（継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクト）

（3）（広島）1/1(日) 祖母、篠田恵を取材して～「あんた、骨の上を歩いとる

みなさん少し遅くなりましたが明けましておめでとうございます、つなぐPJのしのです！

今回は年末に東京から実家の広島に帰省して私の特によく知る被爆者、祖母の篠田恵の話を聞きに行きました。私は祖父母 4 人中、母方の祖母と父方の祖父母計 3 人が被爆者なので昔から原爆の話は話題の節々でよく聞いていましたがその中でも特に私に当時のことを語ってくれたのが恵ばあちゃんでした。



篠田家のおせち料理

2017 年元旦、父方の親戚一同が祖父母の家
に集まって正月会をするのが恒例の行事です。
玄関を入ると

「あんた帰るところがあっていいねえ。」

祖母が笑顔で迎えてくれました。帰る場所や
家族を亡くすつらい経験を若い自分に体験し
た祖母はこうして家族の顔を見るのが大好き
です。

腕をふるって親戚一同で用意してくれた
美味しいおせちを食べ、祖父母と私の妹、そ

して私の4人で祖母の家から電車で10分ほどの場所にある平和公園へ向かいました。

祖母は爆心地から、2.8kmにあった大芝の実家で世界で初めて落とされた原子爆弾によって被爆しました。女学校2年生(13歳)の時でした。当日広島市内にいて被爆した家族は、両親と姉3人、弟1人。祖母の父は兵隊の服を作る所である被服廠に勤め、家には祖母の母と2才半になる弟、社会人だった姉2人のうち長姉は爆心地から8キロ位離れた所の三菱工場へ、次姉は爆心地から500メートルの所の銀行へ出勤しており、三姉は女学校4年生で学校から作業場に向かっていました。



平和公園を歩く

原爆が投下され、祖母は地獄へ送り出されることとなります…

平和公園は祖母の庭のようなものです。私の願いを聞き入れ7年前から語り部として証言活動を始めて、今は平和公園の隅々まで祖母は知り尽くしているようです。

平和公園を歩く道すがら、祖母と一緒に語り部をしている人たちがどんどん少なくなっていくことが寂しいと漏らしていました。上がる名前は私もよく知っている人。そうした語り部を続行できなくなった人たちの中には自身の体験を残している人も、残していない人もいます。私も寂しい気持ちと危機感を感じます。なんとか語っていかうと思ってくれた方々の体験を残して行く方法があれば…



原爆ドーム



平和の子の像



慰霊碑に参る祖父

数年前に祖父の被爆体感を初めて聞きました。壮絶な経験ですがとても祖父らしい体験なのでいつかみなさんにもお話ししますね。



原爆資料館前の祖父母

原爆資料館本館の下は白いシートで囲ってあり、中を覗くと大きな穴と、その周りに掘り起こした土が山になっている状態でした。

妹が興味を示しました。

「何かしよるんかねえ」

「掘り出し作業しよるんよ、この下には数えきれんだけの骨がまだいっぱいあるんじゃけえ」

すかさず答える祖母。

「あんたここ（平和公園）が昔から公演じゃったと思うとるんじゃない？」

「違うん？」

「違うよね、ちょっとあんた（私のこと）教育不足じゃないんね」

私の方を見てしかめ面をする祖母に

「教育不届きでスママセン」

と八の字の眉間に向かって返しました。

「はっはっはっここはねえ、ここ全部家じゃった。スズラン燈が点いて映画館があり芝居小屋があり県病院があり市役所がありここいらはものすごい賑やかじゃった。広島で一番賑やかなところじゃったんよ。それがバーンっと一気に焼けてここにおった人らは骨もきちんと残らんほどに焼けてどうにもならんから仕方無う土を盛ったんよ。」

平和公園の敷地内に当時慈仙寺というお寺がありました。その墓石が残してあるのですが、そこだけは当時の地面の高さのままなので、どのくらい公園一帯が厚く土が盛られているのかわかるでしょう。

被爆した墓石(慈仙寺跡の墓石)

http://www.hiroshima-navi.or.jp/sightseeing/hibaku_ireihi/ireihi/4331.php

後日祖父母の家を訪れて当時の話を聞きました。



祖母は自身の被爆した家の見取り図を大きな紙に書き、当時の様子などを私と、そして一緒に訪れた私の友人に説明してくれました。一緒に訪れた友人の祖母も被爆者。地図を見ながら私の祖母と彼の祖母が被爆した位置を確認したりしました。

最後に祖母は写真を何枚か見せてくれました。被爆数年後の写真です。

家族を亡くし、家も亡くしそれでも逞しく笑顔で写っている祖母に勇気付けられたような気がします。

祖母と家族の罹災地図



被爆数年後の祖母



祖母が被爆した実家の見取り図



昔の写真と祖母



笑顔の祖母の写真の下にある写真にはノーモア・ヒロシマと書かれていました。

しの（継承活動に取り組み人々をつなぐプロジェクト）

(4) (長崎) 1/14 (土) 長崎市 平和への取り組み

被爆地・長崎では現在、長崎市役所が企画・運営し、「被爆者が苦難を乗り越えて語り伝えてきた平和のメッセージを伝えるため」、「核兵器のない未来に向かって世界が手をつないでいくため」^{※1}、様々な活動が行われている。

1月14日、長崎市を訪れた私は、市が取り組んでいる2つの活動を見学させてもらった。

■青少年ピースボランティア

(<http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/action/youth/volunteer.html>)

高校生～30歳未満の若い世代を対象に、原爆の実相や平和をテーマにした学習会を開催。そこでの学びを活かし、子供や同世代の人々に平和の大切さを伝えるボランティアを育成している。活動内容は、平和関連行事でのボランティアや県外の若者との交流会など様々。8月に開催される「青少年ピースフォーラム^{※2}」では、司会進行や被爆建造物などを巡るフィールドワークのガイドなど、ホスト役を担っている。

私が訪れた日は、学習会「留学生と交流しよう！」が開催されていた。この日のメンバーは高校生から大学生まで16名、そこにゲストとしてアメリカ・タイ・韓国出身の同年代の若者が参加。3グループに分かれて交流会が始まった。プログラムは以下のとおり。

1. グループ内で自己紹介
2. アイスブレイキング (絵しりとり)
3. ゲスト 自己紹介
4. ディスカッション (KJ法を用いながら)
5. メッセージ色紙 交換

私も1つのグループに入らせてもらった。絵を用いたしりとりや、ゲストの母国紹介など、どのグループもわいわい言葉を交わしながら、和やかに会は進んだ。

ディスカッションは、ポストイットにそれぞれの考えや思いを書き出し、似たものをグループ化してまとめていった。ディスカッションのテーマが読み上げられる度に、参加者の表情がぐっと引き締まる。

「自分にとって平和な時や楽しい時はどんな時か」

「原爆資料館に行って、どんなことを感じたり思ったりしたか」

「意見が対立した時、自分だったらどうするか」

どのテーマにも、皆、真摯に向き合いながらペンを進め、意見を交わしていく。この過程の中で印象的だったのが、1人1人が常にメンバーへの思いやりと感謝を持って進めていたことだ。話していない人がいれば、声を掛け合い、意見を皆で共有し合う。また留学生の理解しづらい内容の時は、英語を用いながら説明する。自分の意見もしっかり持ちながら、

相手の意見も受け入れる。“平和”について考える空間が、まさしく“平和”を体現しているようであった。

最後に「平和や理想の未来を表す一文字」を色紙に書き、その周りにグループのメンバーからメッセージをもらい、学習会は終了した。

“原爆”や“平和”という堅いイメージがついてまわるが、この会ではそれを感じることは一切なかった。それは若い世代が自分たちで、楽しみながら企画しているのが理由なのではないだろうか。そして、活動を続けていく上で、これが原動力となるのだと思った。



(<http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/keisyo/boosyu.html>)

■家族・交流証言者研修

場所を移動し、今度は「家族・交流証言者研修」の研修会を見学させてもらった。

この取り組みは、被爆者の高齢化により、本人から直接被爆体験を聞く機会が少なくなっていることを受け、平成26年度から始まった。対象となるのは被爆者の家族や交流のある人、継承していく意志のある人。被爆者への聞き取りや原爆についての基礎知識学習、原稿執筆、講話演習などのプログラムを通し、被爆体験を受け継いでいく。

様々な研修の後、証言者として被爆者本人に代わり、講演会などの場でその体験や想いを広く伝えていく。“次世代への被爆体験の継承”において、非被爆者が役割を果たしていくことを目指す取り組みである。

この日は、今年度の研修生の参考として、すでに証言者として活動している2人の女性の講話を聞く機会が設けられていた。

お1人目は交流証言者の白鳥純子さん。13歳の時、爆心地から約850mで被爆した吉田勝二さんの体験を継承している。講話に用いるのは、吉田さんの被爆体験を元に中学生が制作した紙芝居。また、活動が始まる前から交流があったというお2人の間に残る思い出話や、生前の吉田さんの想いを伝える白鳥さんの方言混じりの言葉は、聞き手に吉田さんのお人柄がひしひしと伝わるものであった。

もうお1人は、家族証言者の井石昭子さん。お父様の小泉政利さんの体験を継承する。(井石さんご自身も1歳10ヶ月で被爆しているが記憶にはないとのこと) お父様から受け継いだ被爆体験はもちろん、戦前・戦後の暮らしについてご自身の体験も交えた講話だったので、当時を生き抜いた“人々の生活”というものが身近に感じられた。また実際に軍歌を歌うなど、聞き手が想像しやすいよう、様々な材料を与えてくれる講話であった。

(なお、お2人の講話は長崎市のHPで動画が配信されているので、ぜひ視聴してみてください。※3)

講話が終わった後は、研修生がお2人を囲み、質問や感想を交わしていた。研修生同士の横のつながりはもちろん、証言者と研修生の縦のつながりもしっかり構築された活動な

のだという印象を受けた。



■まとめ

取材の合間に参加者に話を聞いてみた。活動を始めたきっかけややりがい、目標について話す姿は、皆、いきいきとしていた。このような参加者の積極性の高さ、想いの強さ、加えて“若い世代から戦争体験者まで”という幅の広さは、これからの活動の広がりを期待させるものであった。

また長崎市は、昨年から「ピースとーくカフェ^{※4}」という企画を開始した。カフェなどのオープンな場で、気軽に楽しく平和について話そうという、関心や知識の有無を問わず参加できるものとなっている。このように“原爆”や“平和”への堅いイメージを払拭し、身近なテーマとして提供していくことは、今後の継承活動へもプラスとなっていくだろうと思う。

「継承活動は一過性のものでもなく、一部の人々で作り上げていくものでもない」そんな長崎市の姿勢を感じた取材であった。

【注釈】

※1：HP「長崎市 平和・原爆」トップページより一部抜粋
(<http://nagasakipeace.jp/index.html>)

※2：全国の平和使節団と長崎で活動するピースボランティアのメンバーなどが長崎に集い、共に被爆の実相や 平和について学び、交流する取り組み。
(<http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/action/youth/forum.html>)

※3：証言者の講話は下記HPより、一部視聴可能。
(<http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/keisyo/profile.html>)

※4：ピースとーくカフェHP
(<http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/action/peacetalk/201612.html>)

中尾（継承活動に取り組み人々をつなぐプロジェクト）